

## 報 告 書

平成25年11月25日

## 審判指導員講習会に参加して

南支部審判委員 柳鳥 和久

新潟県高等学校野球連盟  
審判部会長 笠輪 充 様

南支部審判委員 近 藤 拓 郎

11月23日から2日間、愛知県東海市で開催された一般財団法人全日本野球協会アマチュア野球規則委員会が主催する、第1回北信越・東海地区審判指導員研修会に出席しました。その概要は、下記のとおりです。

### 記

1. 日 程：11月23日(土)13:00から11月24日(日)12:00

2. 会 場：新日鐵住金名古屋製鉄所 東海レックス野球場

3. 宿 舎：東海シティホテル

4. 講 師：公認インストラクター 桑原和彦 氏

5. 受講者：約70名

6. モデルチーム：至学館大学硬式野球部

### 7. 概 要

両日とも、グラウンドでの実技研修で、座学はなかった。GO・STOP・CALL、投球判定練習、各塁の説明、キャンプゲームの進行は桑原講師が全て行い、インストラクターが実技、スーパーバイザーが指揮と説明の一部を担当する形式で進められた。

初日の夜には懇親会が行われ、東海・北信越地区の全軟、高野連、社会人、大学から選出された審判委員との交流が図られ、有意義であった。

### 8. 所 感

二日間とも晴天に恵まれ、充実した研修会でした。審判委員を指導する方法や講習会などでの説明のやり方、スーパーバイザーとインストラクターの役割分担などを、桑原講師がとてもわかりやすく教えてくださいました。今回の研修をもとに、さらに研鑽を積み、地区の講習会で実践できるよう、努力していきたいと考えます。

新潟県高等学校野球連盟の役員、審判委員、加盟チームなど関係者の御支援により、本研修会に参加させていただきましたことに、心から感謝を申し上げます。

◎期 日 平成25年11月23(土)13時～11月24日(日)正午

◎会 場 新日鐵住金名古屋製鉄所 東海レックス野球場 (愛知県東海市)

◎講 師 桑原 和彦氏

◎受講者 北信越・東海地区9県のスーパーバイザー及びインストラクター

◎モデル校 至学館大学野球部

「いろいろな講習会や全国大会(東京ドーム、京セラドーム、甲子園)に行くと、地方からの派遣審判でものごうまい人を見かける。しかし、二塁か三塁のジャッジをするのみで帰っていく。これは非常にもったいない。

たまたま関東や大阪近辺に住んでいるだけで、ビッグ大会のレギュラー審判になることができる。また、国際大会に出場できる人は、たまたま東京ドームで球審やっていた者とか極一部の限られた者であった。このシステムは不公平であり、おかしい。全国の優秀なアンパイアーの皆さんに全国大会等への出場機会を是非与えるべきである。

特に、審判委員の高齢化が進行している現在、若い審判やこれから審判をやろうとしている若者に夢を与えるためにも、制度改革は必要不可欠である。いつしか大観衆が見守る全国大会さらには国際大会に出場できるという道筋をつけなければならない。

そのために、ライセンス制の導入ということになった。審判のライセンス制は野球だけが遅れていた。ライセンスを付与することによって、誰にも認められた技量を持っていることになり、上位の大会に出場することが可能になる。これまで、全国大会等において『〇〇地区の〇〇という人を派遣します』では、素性もわからないし名前も聞いたこともないためNGであった。ライセンスがあれば誰からも認められることになる。

ライセンス制の導入が叫ばれてから、ここまでくのに6年を要した。ようやく、社会人、大学、高野連、全軟の4団体が垣根を越えて一同会して講習会を開催することができた。今まさに改革の第一歩を踏み出した時である。軌道に乗るまでにはこの先15年～20年かかるかもしれない。皆さんのご協力を是非ともお願いしたい。」

以上は、このたびの大改革に向けて動き出した経緯から指導員講習会の開催に至るまでについて、講師の桑原さんが本講習会の冒頭及び懇親会で熱く語った内容です。特に懇親会の席では、目頭を熱くしながら我々に訴えていたのは非常に印象的でありました。制度改革に向けたこれまでのご努力とご労苦に敬意を表するとともに、すべての審判委員が一つの方向に向かって一丸となって進まなければならないと思いました。

さて、東海・北信越地区計9県から74名の精鋭が集結し、上記のような趣旨からようやく開催に至った指導員講習会に参加させていただきました。このような機会を与えていただき関係者の皆さんに心からお礼と感謝を申し上げます。

言うまでもなく参加者の技術レベルは非常に高く、戸惑いを感じた二日間でした。講習会のメニューとしては、一般的なメニューの中に具体的指導方法が組み込まれたものですが、役割として、「スーパーバイザーは講習会の講師となり、インストラクターはスーパ

ーバイザーを補佐し、模範実技を行う」となっているとおり、我々インストラクターは、専ら実技指導を受け、非常に中身の濃い講習会でありました。

以下、このたび学んだフォーメーション等における特記事項を報告させていただきます。

#### ◆触塁の確認

自分がベースカバーすべき塁のプレイに備えることを優先する。走者がベースを踏まない確率より次塁でプレイが起きる確率の方がはるかに高いため、カバーすべき塁の方向に移動しながらチラッと見るだけでよい。(触塁確認も大事であるが、プレイの判定を最優先するという意識を持つ。)

例 1)

走者二・三塁、3BU ゴーアウト、1BU がリミシングやピポットターンで打者走者の一塁触塁を見る位置は、いずれも一塁と二塁の間地点で、チラッと見るだけでよい。

例 2)

走者一・三塁、3BU ゴーアウト、2BU は素早く三塁に向かい二塁と三塁の間地点で止まり、一塁走者の二塁触塁を振り返ってチラッと見る。

例 3)

走者一塁、3BU ゴーアウト、1BU は打者の一塁触塁をコーチャーズボックスの本塁側の角付近でチラッと確認し、本塁のプレイに備える。(長打の場合、一塁走者はあつという間に本塁へ到達するため、止まって確認していると本塁でのプレイに間に合わなくなる。)

#### ◆本塁タッグプレイの球審の位置 (あくまでも基本の位置)

ひと昔前 … 一塁～本塁の延長線上の少し三塁寄り①

(理由) 走者がまっすぐ本塁に向かってスライディングするときは、走者の足、捕手のタッグが正面に見える。

ここ数年 … 三塁～本塁の延長線上②

(理由) ほとんどの走者が、捕手の(ブロックするような)タッグを避けるためフェールラインの外側をまわり込むため、上記①の位置ではタッグが捕手の背中で見えない。②の位置は、走者～ボール～捕手 がよく見える。

しかし今後は … 投手～本塁の延長線上 (かつベースから 2 m)

(理由) 上記②の位置では、走者がまわり込まない普通の完全なアウトが捕手の背中で見えないことがある。

この位置は、走者のスライディングの仕方や捕手のタッグの仕方に左右されずタッグ が見える確率が一番高い。

2 m の距離に近づくのは、送球がそれで動かなければならない場合、2～3 歩で移動可能であるため。

※ 本塁タッグプレイの位置取りは、慣れるまで相当の訓練が必要であると感じた。特に 2 m という距離は非常に近いので、プレーの邪魔にならないよう挑戦したい。